



TITLE:

# 太平天国北征軍について：その問題 点の一考察

AUTHOR(S):

堀田, 伊八郎

---

CITATION:

堀田, 伊八郎. 太平天国北征軍について：その問題点の一考察. 東洋史研究 1977, 36(1): 92-124

ISSUE DATE:

1977-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153650>

RIGHT:

# 太平天国北征軍について

——その問題點の一考察——

堀 田 伊 八 郎

はじめに

三 天津から覆没まで

一 兵數について

四 援軍の問題など

二 黃河渡河前後

五 結 語

は じ め に

咸豐三年三月、金陵<sup>(1)</sup>を攻略した太平天国軍は四月に北方への運河の要點揚州を陥したあと、憩う間もなく北征軍と西征軍を出動させるが、これは太平天国として金陵を根源地と定めた上でその餘勢を驅つて、まず北征軍は清朝の首都北京を衝き、西征軍は長江上流へ支配力を及ぼし、上流からの壓力を排除する意味において、その二方策とも、力點のおきかなどについて問題はあるとして、當然考えつかれる戦略であつたといえよう。しかしこれら兩軍が、西征軍は一時成功したものの、結局二つながら所期の目的を達することができず失敗に終つたことは、太平天国にとって大きな打撃であつたことは否定できぬであらう。このうち北征軍の覆没は李秀成が悞國の第一番目に擧げてゐるように、少なくとも主觀的な意味で太平天国方に大きい影響を與えたと思われる。それは太平軍の精銳を多く失わせ、北方への進出一頓挫をもたらした、反面清朝方に安堵感を與えたと思われる。しかし北征軍の華北通過は當時不安定な様子を示していたその地一帯に、權力機構の弱體化から、捻黨などが蜂起することになり、清朝廷はその方面にも力を注がざるを得ず、對太平天国作戰に

多大の支障を來たすことになった。そうした影響の面においても北征軍の問題は意味があると思われるが、いまはこの北征軍について論じられている諸先學の説を敷衍する程度で、事實關係といった觀點から問題を考えてみたい。

## 一 兵數について

まず出發時の北征軍の兵數であるが、それについて關聯ある著作、論考に随分と差があることに注意される。少ないのは二・三千人、多いのでは二十萬人ほど、と開いている。理由は史料に出てくる人數の差が大きく、そのいずれを採るかに因るものと思うが、検討の必要はあろう。

人數別に、おおよそ五つほどに區分されようが、少ないものから、A、B……の順で挙げると次のように、

A 二千人ほどの説、

B 一萬人臺の説、

C 二萬人程度の説、

D 五萬人ほどから十萬人ほどの説、

E 約二十萬の説、

ということになるかと思うが、以下これらを考察し、自分の考えも示してみたい。

A説は郭廷以氏のみであろう。<sup>(6)</sup> この説の根據は清方當事者の上奏文中の記事であるが、他の學者の指摘するように、過少であり、一般の贊同は得られないと思われる。それにしても、上奏文中にも人數差が見られるのに、なぜ特に二千人前後の説を出されたのか、理由が示されていないが、中核的なものと見做したのであろう。<sup>(6)</sup> もしそうならば、示された史料からいえば、あとのC説の部にはいるといえようか。

B説では羅爾綱氏を一應擧げる。というのは氏の説を一萬人臺に入れるのには、氏の論の文脈からみるとやや躊躇され

る点もあるからである。しかし北征軍の揚州からの出發軍を一萬二千五百人と明示されているので、この部類に入れたが、それらとはにかく、氏の説には太平天国無謬論、とでもいえそうなものが投影しているように思われる。氏の説は太平天国の軍制が、一軍の總數一萬三千百五十六人という形式をとるので、史料に六軍とか、二十一軍などと出ていると、それを第六軍、といったように一個軍團と解釋されたのではなからうか。もしそうであればその考えが正しくないことは他の著書や史料などでも明らかである。氏の説には先に出了た林鳳祥、李開芳の軍兵一萬二千五百人に、人數は示されていないが吉文元の部隊が加わっている点、二萬人に近い數を想定されているかともいえる。そうなるとまた後から加わった吉文元の兵力は軍團なのか、それとも端數の部隊なのかという疑問も残る。氏の論は一般的に斷言的であるが、ここらに曖昧さを残したことは否めない。同説の華崗氏は出發時「萬餘人、乗船千餘號」と直截で、安徽省北方の鳳陽を陷すころ「兩萬多人」に増加したとある。<sup>(94)</sup> 出發時の史料の根據は示されず、二萬人餘に増加した點では『方略』から一つ史料を引用されている。「萬餘人」の數は史料にもあるが、しかし出發時の萬餘人と、千餘隻の船は史料的には、すぐ結びつかないものである。この著書にはよく史料を検討されずに引用されているのではないかと疑いたくなる所がある。一萬人臺説は、人數の點はとにかく、史料の吟味不足といった面が見られる。

C説は最も多いし、自分もこの考えに立つが、ただ先學の中で史料を一つだけ挙げられているのを見る。<sup>(95)</sup> 一つの史料だけを根據に立論されたとは考えたくないが、その場合揚州方面だけでなく、金陵方面からも出たと思われる軍を考慮されての上かどうか、疑問が残るところである。

D説は人數に差はあるが、便宜的に一つの範疇に入れた。

まず他に引用される謝興堯氏の五萬人説である。この説の根源は湖廣總督張亮基の上奏文中にある太平軍の人數に依っているわけであるが、この揚州、金陵方面から出た太平軍が七、八萬あるとどうして張亮基に知られたのか問題である。彼は安徽、湖北方面の戦いに關與し、その上奏文中の報告も虚飾は少ないように思うが、北征軍、西征軍について他の清

方當事者たちよりの確な情報を得ていたかどうかが判らない以上、張亮基のこの史料を、謝氏が「此奏實爲可重視之文獻」とされる理由もないようである。氏が主張したいのは要するに、七、八萬人出た人數から江西方面にいる二、三萬人を引くと五萬人になる、ということではなからうか。つぎに同じく五萬人説に范文瀾氏がある。<sup>(65)</sup>これには史料が示されていないので何ともいえぬが謝氏の説と同じ考えかとも思われるが、史料的に五萬人という數が出ているのは、羅惇齋『太平天国戰紀』中に見られる。もしこの説を氏が採られたとしたら、この書に持たれている疑いもあり、立論の根據として是不充分であろう。さらにフランツ・ミハエル氏である。氏は正確な數は不確かであるとした上で、郭廷以氏の説を斥ける意味もあつてか、方略中の二・三千人という數を中核であらう、とし、また曾根俊虎の三十六軍、各二千人説をただ例に挙げ、<sup>(66)</sup>そうして簡又文説の十萬とある個所をやや多いとして、謝興堯説が受容されるものとしてある。<sup>(67)</sup>しかし氏の論では一萬説、二萬説といったものに觸れられていないのはどうしたのであらうか。そこでこの部で多い人數の方の簡又文氏の「大約六・七萬至十萬」説である。氏は太平天国の研究の量において他を壓しておられ、史料の博搜など、到底自分ごときの及ぶところでないが、考察の點でいくらか精緻さに不足するように思われる。兵數に關してもその缺點が現われているようである。結論として出された氏の主張されるほどの人數が浦口に集中し、三路に分かれて出發した、ということがまず疑問に思われる。それだけでなく、「三路」に林鳳祥、李開芳の軍、吉文元の軍、朱錫錕、黃益芸の軍の各軍を二萬ほどとし「則全軍總有七八萬矣」とされたりするのは立論が無理といわざるを得ない。氏も自信がないのか「仍待考證」と結んであるのもそのためであらう。<sup>(68)</sup>

E説の王淑慎氏のものは北征軍の人數のみをテーマとした最初のものであらう。<sup>(69)</sup>この論考には史料も外國人である自分には見難い中央檔案館藏の史料や、北京師範大學藏の抄本などが利用されており、今のところそれらを見ていない者として、その史料の價値の當否は勿論いうことはできぬことであり、氏の説に對して明確な判斷を下せないものであるが、どうも傍證とされた史料で自分の見得たものなどで考えると、氏は自説に都合のよいものだけを利用されている嫌いがある。

例えば『張維城自述』に、「在懷慶者共有九軍……」とあると、その九軍に羅爾綱氏の一軍二萬三千一百五十六人説を援用して「即十一萬八千三百九十四人」とし、その傍證として、陳思伯の『復生錄』中の「九軍約十一萬人」や、さらに『垣曲縣志』中の「賊李、林、吉等率衆十餘萬、竄擾河南」という一節を引いてある。そしていまの九軍に加えるに朱錫鋹、黃益芸らの率いる、天京（金陵）から出たとされる軍を六軍として「北伐軍出發時的人數當有二十萬人左右」と述べてある。六軍、九軍のことはあとで言及するが、その九軍についても「賊來九軍、每軍詐稱一萬、其實所稱者、只二千五百人耳」という記事もあり、『垣曲縣志』の記述も山西省の縣志に河南省のことを述べるのは明らかに傳聞か、他の記事に依ったものと思われるのである。この王氏の説は最も従いかねるものである。

それで、自分の考えであるが、出發時に二萬人餘、天津到達のころは三萬人程度、としたい。

C説と同じようになるが、虚飾が多いとされる、『方略』、『東華錄』など清方の記録が、注意すれば充分、というよりも利用に値いすると感じそれらを綜合した結果である。出發時に二萬餘と推定した理由の一つは『方略』に見る北征軍の人数が、報告者が變つても、一萬、または二萬程度のものが多いことである。數萬以上というのもあるが、その一つの河南巡撫陸應穀の上奏は歸德で敗戦のため敵の人数を多く見たか、糊塗するためか、またはそのころ北征軍の人数も増加していた點もあるためか、と思われる。しかし彼がそのあと北征軍の主力が留った朱仙鎮での數を「約有萬餘人」と報告し、分軍が行った劉家口での數も、別人の報告であるが、「不下數千」の程度であるのを見ると、先の報告も五萬以上といった大きい數は考え難いのである。

さらにいま一つ見逃がせないこととして、清方當事者の上奏文中にある北征軍の死者の數である。これについて言及している先學が無いのは不可解であるが、考慮すべきことと思われる。『方略』に出ている北征軍の損害を計算してみると、黃河以南の歸德方面から、最後に馮官屯で覆没に至るまで、捕虜死者は大體三萬八千人ほどで他に降服者三千人あまりである。そうすると二萬人臺と大分異なることになるが、清方當事者の過大報告もあるようだし、さらにいわゆる襄脅といわ

れる途次での参加した人数があり、死者の内譚的な記事を見ると、途次での参加者数は出發時の人数よりやや多かったことを推定させるものがある。<sup>(80)</sup> つぎに天津到達時に三萬人ほどとしたのは、『方略』中の記事と天津方面から覆没にいたる、同じ『方略』中に見える北征軍の死者や降服者の数にあまり矛盾が見られない点などからである。

それで兵數に特に關連しないかも知れぬが軍の數について考えて見たい。これも史料に六軍、九軍、二十一軍、さらに三十六軍など、異つたものが見られる。この數のどれが正しいのか今は判らない。一應各軍數についての考えを述べるだけに止める。まず六軍であるが、『賊情彙纂』では吉文元、朱錫銀、黃益芸の項に「帶六軍」の語が出て、林鳳祥、李開芳等の項に軍數が記していない点およびその二人が揚州から出發したことが出て、六軍の方の三人は金陵方面から出たことと思わせる點があることから、六軍は金陵方面から出た軍だけと考えてよいと思う。その人數もリンドレーに出ている約七千人がそれに當るのではなからうか。林、李以下の北伐報告書といわれるものから見ても、六軍説は除外されてよいだろう。次は九軍であるが、これは否定できるような史料もない。民間人の書、いわゆる野史の類だからとて信をおきがたいとも必ずしも言えぬし、當局者のものとして信じられるともいえぬが、清當局の關係あるような書では二十一軍以上であるし、後に出た第一次援軍が十五軍であることを考え合わせると、九軍では少ないのではなからうか。そうすると二十一軍あたりが最も妥當なところでなからうか。おわりに三十六軍のことである。『清史稿』の記事は簡単に過ぎ判斷のしようもないし、臆測を行なうべきでないが、あるいは二十一軍と第一次援軍の十五軍を合計して、三十六軍としたのではなからうか。

## 二 黄河渡河前後

太平軍北進の風説は流れていたのであるから、現地の清軍として防備策はとれないこともなかったであろうし、幾分かの對策は取り始めていたが、充分な兵力を浦口方面に配備しなかったのは、揚州方面への兵力を重視したためであろう。

一八五三年五月十一日から十五日にかけて北征軍は浦口およびその附近に上岸し、北大路といわれる幹線道路沿いに主力が北上を始め、十六日には滁州に至っている。この軍の進撃路、すなわち滁州から鳳陽、歸德へのルートは、

周天爵・呂賢基奏言……至賊匪渡淮北竄之路、若畏避宿州、必由懷遠・蒙・亳、而窺河南歸德之劉家口。

とあるように、清方當事者中で豫見するものもあったが、清廷でははじめ一時は太平軍方が揚州包圍の清軍に牽制を行なう一戦術とも見たようである。しかし同時に北方に來ることも考え河南巡撫陸應穀に命じて河南永城の兵を提督善祿が帶して安徽方面に向わせ、〔江寧〕將軍托明阿にも迎撃を命じ、さらに〔察哈爾〕都統西凌阿などに追撃を命じている。しかし北征軍は清軍の追尾、迎撃をさほど受けず鳳陽を陥したあと、〔淮河支流の〕渦河邊で陣を設けていた周天爵の軍をかまし、渦河沿いの渦陽縣、雉河集のあたりを通って歸德府に達し、六月十三日これを陥している。渦河の邊は後年捻黨の亂で知られる所であり、捻黨の參加、誘導があったと考えられる。

この捻黨と北征軍との關聯についてこの時だけについて少し觸れてみると、太平天国の亂のためであるが、咸豐三年春に永城、歸德方面で捻黨に「先後擒斬著名捻首陳毛奇等九百有奇」とか「大守陳公禦之嚴、癸丑春、勦殺無算」といった大彈壓が行なわれ、一部の「賊懼、投周漕師天爵降、賊平」ぐといった狀況に一時はなったのであったが、北征軍が進出して來ると「漏網者因以挾讎、乘粵匪犯蒙・亳、前往煽惑、引以西來、直犯歸德」となったのが實狀であろう。それはまた北征軍が宿州から徐州への道をとらなかつたことも關係があるかも知れない。北征軍が宿州を避けたのは普通、

初九日癸丑周天爵奏言……並獲粵匪楊懷傳等五人。供稱、賊之僞東王李姓、更有林・吉二姓爲大頭目。本欲北窺徐州、因宿州有虎・勇駐守、不敢北來、改道由懷遠、西趨蒙・亳……。

とあるように廣西省で初期に太平軍と戦つた周天爵の軍を避けた、ともされるが、北征軍に投入した誘引者が同類者のいる所を避けさせたとも考えられる。

こうして歸德府附近に達した北征軍は、その少し南の宋（家）集で陸應穀の軍を破り、府城を攻めるが、ここは在城の



兵が少なく、内應者もあつてかすぐ陥ちた。ついでまた城外で陸應穀の軍を破っているが、北征軍は歸德を陥すとすぐ軍を分け、分軍は黄河の渡河點劉家口に向い、六月十三日にはそこに到着した。<sup>(64)</sup>その地の清方當事者はしかしそれより以前にそのあたりの船を北岸に引き揚げており、さらに奪取を虞れて「全行燒燬」という手段をとっていた。そこでの北征軍の渡河は不成功に終るわけであるが、その間の状況と黄河北岸の清方當事者の心情は次の山東巡撫李德奏文の、

李德奏言、接據曹州府縣稟報、賊於初八・九等日、分竄劉家口、時該縣姚景崇、已將收泊北岸船隻全行燒燬、盡力防堵。旋從曹河上游、來船二隻、行至中流。姚景崇見係賊匪旗幟、督令兵勇、用礮擊沈、傷賊約二百餘名、後亦無船繼進。初十日瞭望、賊已陸續西行、十一日劉家口上下一帶均無賊蹤。臣思、賊匪分竄、所向披靡、設非天險河流、早已北竄深入。此次南岸劉家口賊匪、不下數千。究因船隻收泊燒燬、不能徑渡。可見守河之效信而有徵。<sup>(65)</sup>よく表わされていよう。

開封はほとんど攻撃しなかつたようである。<sup>(66)</sup>全軍朱仙鎮に集結し、この時に増水中の黄河を渡るかどうか、改めて方針を決めたと思われる。<sup>(67)</sup>

六月二十七日から汜水縣方面で、鞏縣地方の洛河で得た「煤船」を利用して渡河を始めるが、完渡せぬさきに七月一日には追尾の清軍の托明阿らの軍により、一部の軍は截斷されて南岸に残され、南方に軍を返すことになった、そこで問題が二つほど出るのであるが、一つは渡河の状況のこと、いま一つは南返軍の結末についてである。まず渡河と船隻のことであるが、時期は黄河の増水期であるとはいふまでもないとして、北征軍が黄河に到達したところは特に出水が甚しく、七月四・五日に歸德東北の豐縣で北方に漫溢しているほどである。<sup>(68)</sup>安徽省方面もそのころ雨が多かつたようで、六月十八日揚州から出發した追尾の内閣學士勝保の上奏にも遅延の口實かも知れぬが「泥水過深、毎日僅行三・四十里。」とある。このようなことで黄河渡河は平年に比べるとはるかに困難だったといえよう。<sup>(69)</sup>ただ托明阿の上奏にあるごとく、七月一日には汜水縣方面に大小百餘隻の船があつたとすれば、追尾の清軍が到着せぬ以前に全軍が渡河できたのではないか、との

疑問も出ようが、その船の大きいものはいわゆる煤船でなく、對岸で獲得したものかと思われる。それで船隻そのものの輸送にも時間がかかり、渡河が遅れたと考える方が自然ではなからうか。七月二日に黃河對岸の溫縣を陥しているのも、本隊の渡河が遅れていることを示すといえよう。要するに北征軍は最も困難な時に渡河したことになる。これに對し追尾の托明阿らの清軍はそのあと七月十五日に十餘隻の船で一日に千餘名を渡している例が見られる。北征軍にあてた場合、單純に考えると六月二十七日から七月一日までとして百餘隻で五日間とすれば五萬餘となり、さきに述べた兵數の問題とも關聯してくるが、兵數については考えを改める必要はないとする。理由はさきの兵數に關する本文での考えと、さらに清軍は豐縣地方の漫溢のあとで渡河が易しくなったかも知れぬし、船隻の大小が不明であり、北征軍が使用した實際の日數も不明であるからである。

つぎに南返軍のことであるが、意見の分裂から本軍と分離したらしいことを示す史料もあるが、この軍の行動から見ると信をおき難い。相當強力なように述べられている史料例もあるが、戰禍におびえる民衆心理を表わしたものでなからうか。南返軍は諸説と同じく、殿軍で渡河できぬままに、朱仙鎮の軍議あたりで出たかも知れぬ、西征軍との合流を圖つたものであろう。またこの軍の人數についても諸説に相當の開きが見られる。少ないのは千餘人、多いのは二、三萬人である。約四千人とされる郭廷以氏、明確な數は示されぬが數千人を想定される戴逸氏の説が實數に近いのではないか、と思われる。さきの兵數の場合と同じように概算してみると約五千名ほどの死者で、『方略』の中の報告には前後の矛盾はあまり見られない。この南返軍は進軍の間に勢力の増加はなく、長江近くの安慶のやや上流の方面で、そのころ進出していた西征軍に合流したようであるが、人數は少なく傷亡して殆んど盡きていた、のが實情と思われる。

北征軍の主力は溫縣を陥したあと懷慶府城の圍攻を始めた。「必得を期した」ものと思われるが、清廷の上諭に、  
上又命軍機大臣、傳諭訥爾經額・恩華・托明阿・張集馨曰、懷慶爲河北要地、太行門戶、素稱繁庶。若任賊盤踞、西竄澤・潞、踞險負隅、勢將繞出直隸腹地。且逼近衛輝、若由衛河、入天津勢甚便捷、亦不可不急爲防範。

とあり、また同じく、

上又命軍機大臣……賊匪渡河以來、瞬將月。該郡城火器最多、賊所覬覦。且堅守已久、城中乏食。<sup>(74)</sup>

とあるごとく、要地で繁庶の地であり、また火藥、兵器を産するためそれを目的としたのは事實であろう。<sup>(75)</sup> しかしまず要地であるから攻めた、とはいい難いであろう。そこを陥さずとも、東、西、北のいずれへ向うにも障害になったとも思えぬからである。やはり火藥類を目的としたものと思われるが、單に火藥、兵器を欲したのでは貪りに過ぎぬ。特にそれらが必要とする事情があったのではなからうか。開封近くで「賊營火藥盡濕」<sup>(76)</sup> といった史料を見るが、一方に「各項俱皆豐足、但缺穀米一事」<sup>(77)</sup> の記事もあり、北征軍は歸德方面での勝利で火藥を入手したのも事實と思われるから、火藥は朱仙鎮にあるころには不足していなかったとも思われる。しかし懷慶では不足していたとも考えられるのは、それは黄河渡河に際し、「渡河之賊、將驟馬輜重棄去」<sup>(78)</sup> といったことが考えられるからである。

稟稱、府城自初三日被圍、迄今兩旬有餘、城西角被賊用地雷轟擊一次、東南角轟擊二次、俱經搶護得完。惟城內糧食僅數數日。<sup>(79)</sup>

を見ても北征軍は火藥不足から城壁爆破がうまく行かなかったのではなからうか。こうしてこの攻圍では持久戦で食糧攻めも圖ったようだが、その間に揚州から勝保の率いる援軍も到着し、さらに清軍の兵力も増強されたので、圍みを解いて西走することになった。先學も評されるように失敗の一大原因となったとも言えるし、また捷路である山東省方面への進出をさしあたって不可能な状況にした點でも、戦局に重要な意味を持つことになった。すでにそれより以前、北征軍が歸德府を陥したころに、黄河以北の地が相當なバニク状態にあったことは次の、

張集馨又奏言、……督臣續調之兵、雖尙有二千五百名、然總須接程行走、而各州縣紛紛告急、實屬顧此失彼。查賊勢疾如風雨、數日間連陷河南數邑。一經渡河、萬難抵禦。惟有御懇聖恩、迅撥重兵、加派大員、兼程來防、統兵進剿、以重畿輔、而安人心。また、

上諭内閣曰、……茲聞、近賊各省會府縣地方、仍有官吏先搬眷屬、致令紳士商民遷徙不能禁止者。似此遇事張皇、何以爲民保障。

などのような文を見ても察せられるところである。北征軍が懷慶に拘泥することなく、渡河後直ちに山東方面に進出していたら、華北一帯の崩壊にすぐ繋がったとはいえないにせよ、清朝にとって相當重大な情勢を齎らしたであろう。

それと懷慶攻防でいまひとつ注意すべきは、清軍は東方、東北方に兵力を集中し、西方に薄くしていることであり、この東方の清軍に對する北征軍の攻勢らしいものは殆んどみられないのである。結局山西省に入ることになるのだが、この懷慶で清軍が東方へ兵を集中した作戦は、現地の清軍が意圖したように思われる。清廷では早くから北征軍を太行山系方面に入れぬよう命じており、地方當事者もそれに應えるような奏言はしているが、懷慶の清軍の攻撃は東方、東南方、南方からのみで、それで勝保は上奏文中で「西路現在無兵」を兵力不足のためとしている。このようなことから北征軍が山西省に入ったあと「調度布置未能周密」ということで山西巡撫哈芬は革職鞫問、欽差大臣訥爾經額は褫去黃馬褂の處分を受けている。しかし清軍の一般的な怯懦をもつては、それが北征軍の東方への進出を防げたのは成功であつた、と見るべきであらう。

北征軍はこうして秋近くなつて山西省を轉戦するが、清軍の追尾も緩慢で、各地の防禦も不充分のためか縣城などつぎつぎと陥ち、清廷は、軍、地方官に追撃、防衛の不備につき叱責の語を下しつつづけている。勝保の追撃も「勝保免送」と擲揄されるものこのころらしい。山西省でこのような状況であるのは、一つには清軍が北征軍を京畿よりもやや遠くに去らせた氣の緩みがあつたか、とも思われるが、山西省の當時の社會的状況もあるかに見える。山西省はそのころ動搖が少なく、その反面「民情素懦」と清廷に言わしめているような面もあり北征軍への抵抗は弱かつたらしい。そうしてまた北征軍の人数も増加するが、しかしそれは必ずしも戦闘力の強化になつたとはいえぬだろう。後の天津方面で食糧不足の一因になつたかも知れぬ。

### 三 天津から覆没まで

北征軍は山西を轉戦する間にも各方面に、進路などにつき偵察者を出しているようである。そして北京を目指しているのは變らぬが、まず山東方面から天津を目指したようである。若しそうであるとして、理由は判らぬが、恐らく北征軍自體の中で、直ちに北京を攻略できる力量がないと判断したのでないか、と想像される。客觀的に見て北京周邊での清軍の勢力は相當強力であり、また北京は堅城であり、北征軍の力で攻陥できたとは考え難い。たとえ當時の北京がパニック状態に近かったとしてもである。それは懷慶を、火藥不足などの問題があつたかも知れぬが、拔けなかつたことから理解できることである。さらに深州で勝保の軍と戦つてこれを破れなかつたようであり、戰鬪力は少し弱まつていたのではないか。さらに天津での越冬も考えたのではないか、また誘引者もあつたのではないか、などのことが考えられるがいずれも推測に過ぎない。

ところで當時直隸省は七月に永定河の決潰があり、さらに「秋雨過多」とあるごとく、一面に出水で、北征軍のように運動戰を續けることで勢力を擴大しようとする場合、全く不利な状況にあつたわけで以下の、

僧格林沁奏言、逆匪現竄獻縣地方。雖在深州迤東、偏北切近河間。惟據探報、河間迤北、新城以南、雄縣・鄭州以東、至天津及任邱・大城・靜海一帶、現因積水成河、不通旱道、逆匪似難北犯。

はそれをよく示していよう。そのためか勝保は一時北征軍が南下する可能性も考えているが、北征軍は、

勝保奏言、……因步隊每日行走僅及百里、復親督馬隊、先行前進、急欲繞出賊前。而賊於沿路搶船順流而下、其行甚疾。是日酉刻、臣行抵青縣、賊又竄過、知縣並無下落、縣城並未滋擾。伏思目下情形、天津最爲緊要。必須親往布置、以期無誤事機。若徒恃尾追、則賊行剽疾異常、又恐緩不濟急。且運河左右皆水、僅有一綫單隄。賊在河東水陸同行、……

と一途天津に向つて進撃している。しかし天津の攻撃は天津四面が水といわれるほどのため、攻撃も強行偵察程度で撃退され、また追尾の勝保の軍と靜海縣城外で戦つて撃破されてもおり、天津への本格的攻撃は行なわれず、北征軍は獨流鎮と靜海縣にわたつて紮營する。これは結氷を俟つて攻撃を行なう計劃でもあったのか、その點は判らぬが、どうも北征軍は自己のおかれた状況を軽く見ていたのではなからうか。第一に敵の本據近くで敵の大軍が集中している近くでの紮營行爲の不利なことは明らかなことであるし、第二にその地方はまた先に述べた多雨と出水で食糧不足に悩んでいた。追尾の勝保麾下の軍も糧秣不足で苦しんでいる有様である。少し持久戦となれば糧食の面で行き詰ることは明らかである。それでも天津近くに留まつたのは、結氷後の攻撃の他に、内應でも恃んだのか、ただ出水のため行動の自由が制限された結果としてか、今後解明さるべきことであらう。

かくて「靜海城外四面皆水」では、北征軍は遊撃戦も行なえず、木城を構築して防禦するのでは、結局消耗戦となり清軍に有利に展開することになる。清軍は早くから大型の大砲を移動させて砲撃を加えるが、やがては天津海口より七千斤、一萬斤といったものを動員している。北征軍も進撃の途次で鹵獲したと思われる砲はあったようだが、砲撃力では到底比較にならぬであらう。そして清軍の方の砲撃は木城、屋宇を破壊するだけに止まらぬことも明らかで相當の有效性を持ったであらう。北征軍も清軍の砲の所在地に攻撃をかけるが撃退されている。こうして約三ヶ月の攻防の間に相當の損害を受けた後、南方に移動するが、時は嚴冬、夏の裝備と思われる北征軍に最も不利な場合といえる。年を越した四年二月五日の夜から主軍が移動をはじめ、西南に向うが、六日には僧格林沁の馬隊の追撃で「六十餘里、賊屍枕籍」といった大損害を受ける。この不利な嚴冬の最中に行動を起こした理由は一つに、

僧格林沁奏言、……近獲由賊營逃出之人供、有逆匪婦女扮作乞丐、往南乞援、並南省之匪。二月可。到等語。雖似逆匪捏造之言、未足盡信、……

とあること、第一次北征援軍が二月四日に安慶を出發しているのを考えると、その時を合わせたこと、さらに食糧不足、ま

た清軍の砲撃で屋宇が破壊されたりして寒氣が堪え難くなったことなどから、他に適當な紮營地を求め、援軍を俟って捲土重來を期したとも考えられる。だがこの移動に際して犠牲者が多く出ただけでなく、その後も移動は勢力を増すことなく犠牲者を出すのみで、阜城に至って暫く止まることになる。これは天津到達以前の追尾軍が勝保麾下のものであったのに對し、僧格林沁指揮下の馬隊を主とする軍の追撃が強力なためである。

阜城で二ヶ月近く止まるが、全城ほとんど水で、住居もなく、加えて清軍が砲撃で家屋を破壊し、また長壕を掘って北征軍を封じ込めようとするので、脱出して連鎮に奔るわけである。それで阜城に北征軍がいるころ、僧格林沁と勝保は、阜城附近の戦いの報告中、

至該逆、狡猾異常、其藏事之期、不敢豫定。然賊匪屢受懲創、斷難蔓延、北竄之虞似可無慮。<sup>133</sup>

と奏言している。必ずしも強がりではなく、その三月という季節から見て北征軍は餘力があれば反撃的遊撃戦に出てもいいのに、防戦だけなのは、何とか防禦的陣地戦を持ちこたえて、南方からの援軍の來着を待んでいるようである。

一方清廷は援軍の北進がはつきりすると、また強硬命令を下しつづけるようになり、清軍一般の怯懦などあるが、剛毅な性格の僧格林沁は時に危険を冒すようなこともしている。<sup>133</sup> 北征軍は阜城脱出後、連鎮に走り、李開芳らの騎馬を主とする一部が高唐縣、さらに馮官屯に行つて最後を迎えるのを除き、林鳳祥以下の主力はここに止まり、長壕によって封じ込められ、一部の降服者を出して滅びるわけであるが特に述べるまでもないと思う。ただ降服者についてであるが、獨流鎮、靜海縣にいたところから、それは北方でのいわゆる脅従者が主と思われるが、出はじめ、それを北征軍攻撃に用いることを勝保が進言している。<sup>137</sup> これに對し清廷ははじめは否定的であるが、後に束城、阜城のあたりから投降者を使って北征軍攻撃に使用することを認め、連鎮では相當數が降服し攻撃の先鋒に使われている。<sup>140</sup> この降服者のその後の状況は不運だったようである。終局的にどうなったか判らない。

とにかく結論的には北征軍が天津に向つてこれを陥せず、獨流鎮、靜海縣で留まつた時に、援軍のこととも關聯はする

が、事は決した、といえよう。事後的な判断になるが、山西省方面に止まっているか山東省方面に向つていたらまだしもよかつたのではなからうか。

#### 四 援軍の問題など

北征軍が金陵の本據と連絡をとることに努めていたことは問題ないと思う。連鎖で李開芳らが南方に逸出したのも援軍との結合を目的としたものであったことも疑いないであらう。清廷は阜城での北征軍の突出に對し、常時臨清に来ていた援軍との連絡を危惧している。その後連鎖近くでの北征軍の捕虜の供述に、臨清で援軍と迎接することになっている、とあるが、その時には黃生才らの援軍は臨清から敗退してしまっていることを、北征軍は知らないためであらう。清軍に乘じられている例も見られる。阜城から連鎖に赴くころには連絡は途絶えていたと見るべきであらう。そのような状態のうち、臨清まで来た援軍内で、さらに阜城まで行つて北征軍を救おうとする考えと、前途に清軍が多いのに恐れたのか、一部北進を圖つたが、勝保の軍に撃退されたこともあつてか、退却しようとする考えが對立したようだが、そのうち後から加わつた弱體分子が自己崩壊をはじめ、清軍に乘じられて援軍全體の潰滅となつたといえよう。ここでも清軍の勝保は北方に兵力を集中して、とにかく敵の北進を防ぐ、懷慶で採つたと同じような作戰を行なっている。これも清軍としては成功したといえよう。

それで、黃生才、曾立昌ら援軍自體の問題であるが、十五軍、おそらく一萬名に滿たぬ兵數で出發したと思われる。この軍が進出するころ、北征軍進撃のあとの地方權力の弱體化、清軍の兵力の分散などで、進路のあたりは捻黨などが蜂起し、その地域一帯が混亂し始めていた。このような状況から援軍の勢力は急速に伸長したのであらうが、しかしこの急速な人數の増加がかえつて失敗につながつたと思える。臨清邊でのその規律の弛緩は、

殺百姓大小男口十數萬、惟婦女殺少留多、在城內賊目擄掠財物外、肆意奸淫、賊首黃生才等在外聚營、不能禁止、遂



傳令將城中婦女放出。……又新襄鄆・鉅一帶捻・幅及各路土匪、每人腰纏金銀、不願隨賊接仗、彼此暗約、千百成羣、乘間陸續潛逃、賊衆往追、轉爲所傷、前後受敵。賊欲往北、又破官兵阻扼。

とある記事や『粵匪陷臨清紀略』の記事を考え合わせると否定できぬところである。不純分子ともいふべき者が大量流入した集團で、中核的指揮力が弱い時、ことが順調であればとにかく、一旦齟齬を來たした際にどうなるか考えるまでもないことである。はじめの北征軍の場合、中核が精強であり、またあとからの安徽、河南、山西方面での参加者も、先に觸れたが、はじめの二倍を越すようなことはなかったと考えられ、捻黨、水手といった分子も北征軍の指揮、規律に従うようになっていたと思われる。しかし後の援軍の場合、匪賊的分子が飢民などと共に流入し、数だけが増加するのでは、清方で「裹脅・土匪」と言うのも一理あるといえよう。こうして第一次援軍は潰散すべくして潰散したといえるが、阜城まで僅々百二十キロほどの近くまで接近しながら、臨清での食りのため、それも指揮力不足のためと思われるが、功を一簣に虧いた感もある。

さらに第二次援軍のことであるが、李秀成供狀に見るが、清方では當時援軍として把握していないようで、廬州攻防の一環として記録に出ている程度である。實態、軍の大きさなど今は判らない。

## 五 結 語

そこで北征軍の失敗の原因についてである。これまでの文中でも幾分觸れてあるし、諸先學の意見を綜合すると、その理由は盡くされるようなものであるが、少しく整理し、補う必要はあるかと思う。この點につき、郭廷以氏、簡又文氏の説が要を得ているので、それらを主にして個條的に挙げると次のようになる。

- 1 少ない兵力で北進し、勢力増加が華南方面ほどに伸びなかった。
- 2 占領した城市に守備をおかず、後方との連絡に缺け、後援が續かなかった。

3 清方の兵力の強い所に進入し、また清方も安危の關わるところなので強く抵抗した。

4 南北の氣候が異なる點への配慮が不足し、酷寒に耐え得ぬことになった。

5 捻黨など地方民衆との連繫が不充分であつた。

6 南北の民情・風俗などの相異が障害となつた。

7 黄河渡河に誤り、懷慶で時間を空費する誤りを犯した。

大體以上で、その他食物説などあるが重要とは思われない。

これらはそれぞれ當を得ているが、自分として少し補う程度で考えた點を述べてみたい。

一には當時の、長江を境として、華南と華北との社會的條件の差である。太平天国軍が金田に蹶起した初期、大きい勢力でもなく、しかもそれが易服蓄髪を行ない、單なる民衆暴動と異なり、明らかに公然たる對清朝叛亂であることが認められており、清方もこれが討伐に主目標をおいていたにも拘わらず、半年以上の間、同一地方において遊撃作戰を續けながら勢力を維持できた大きな理由の一つは、その時の廣東・廣西・湖南などの社會の動搖に求められよう。

この地方の動搖の原因をどこに求めるかとなると、論議があり、適宜な論證はできないが、鴉片戰爭および鴉片の問題が、それに繋がるいゆる會黨と共に考えられよう。また太平天国の動亂に先立つ動搖のうち、湖南省新寧縣の李元發の亂は大きく、清軍はその鎮定に六ヶ月も要している。そしてその叛亂者の一部は廣西省に流入している。廣西省において「羣盜如毛」と報告されるようになる原因も華南一般の社會不安が考えられる。このような狀況があつたとしても、太平天国軍の戰鬪力、堅忍性、規律力などの主體的な把握力がなければ、その情勢を利用できぬであらうが、とにかく太平天国軍に有利に働いたことは否定し難いであらう。さらに太平天国軍が後に通過した湖南省地方に會黨が多かつたことも指摘されているところである。それといま一つ重要と思われる華南と華北の差は、華北では捻黨の動きも當時活潑化しはじめたものの清方の對應策で彈壓され、大規模なものに發展していなかつた點である。北征軍が少數で出發したことはそ

れ自體特に不利な條件になったとは必ずしも言えず、社會的條件が不利を齎らしたといえよう。さらに敵の本據地近くに動搖が少ない場合は、そこへの進軍は無謀ともいえよう。華北は先にも言及したように北征軍の通過後に大動搖が始まるのである。

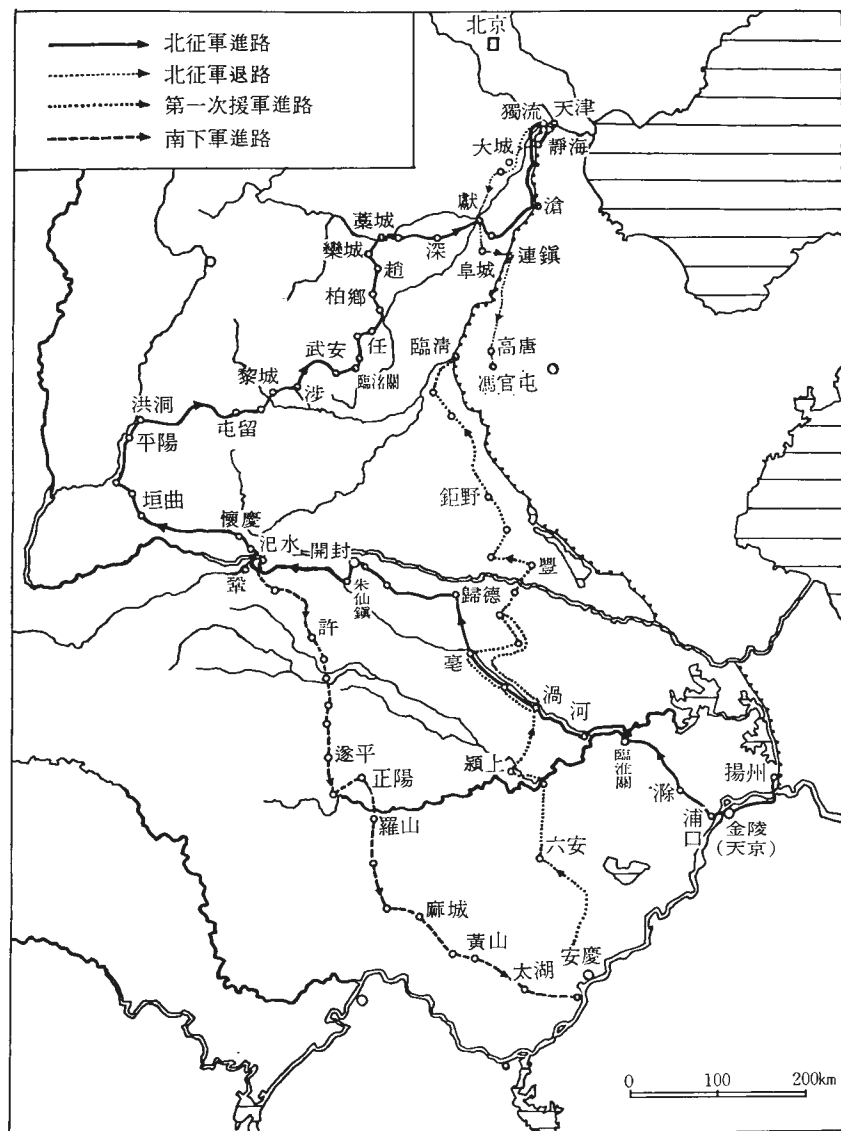
二に華南と華北の地形的、氣候的條件の違いであるが、地形的條件として黄河が北征軍に大きい障害になったことは否定できない。長江がその支流をも含めて、太平天国軍が華中、長江下流に進出するのに有利に働き、黄河が北征軍に不利に働いたのは皮肉ともいえよう。さらに氣候的條件で華北の冬季のことにつき太平天国の首腦、北征軍の指揮者を含めて、認識不足があったと思われる。北征軍には不運としかいえない不測の降雨、増水もあって、また不利を増大させたこともいえよう。廣西省では太平天国軍が清軍の壓迫で山中を轉戦しながら存立できた理由の一つに、この遊撃作戰を常に行ない得た氣候的條件を無視できないのではなからうか。

三に言語的ともいふべきものの差も考えられる。連絡、通信に障害があったことは明らかに認められるところである。<sup>064</sup>  
四に清方で、太平天国の亂が起こつてから華北方面でもそれなりに手を打っていることである。捻黨の取締りの強化、<sup>065</sup>

ついで大彈壓を行なうが、團練を設けることで遊民などを體制的に組み入れる方策も取っている。<sup>066</sup>それは直接に戦いを左右するようなものではないにせよ、反體制への傾向を弱めさせる意味はあったであらう。さらにつけ加えたいのは僧格林沁の奮闘であらう。北征軍と大城方面で戦つてから、これを全滅させるまでの主役は彼とその麾下の馬隊にあったことは疑いない。北征軍が天津方面から以後移動のたびに大きい損害を出したのは、清軍馬隊の追撃、それを指揮する僧格林沁の精勵さにある。<sup>067</sup>その點勝保とその部下は怯懦であつた。<sup>068</sup>

いま一つ、北征軍が示した堅忍さは多く説かれることで改めて述べるまでもないが、その中心指揮者の林鳳祥も優れた人物だつたと思われる。<sup>069</sup>彼のような指揮者があつて、北征軍は敵の本據近くで不利な條件にも拘らず、少なく見て二千キロ以上の長途の遠征を行ない得たといえよう。それとまた悲劇的に終つた北征軍自體の失敗の面よりも、太平天国の首腦

太平天国北征軍關係圖



の戦略は失敗だったのかどうか、西征軍との関係も入れて考える必要もあろう。<sup>170</sup>

北征軍の覆没で清廷の焦慮は一時緩和されたようである。<sup>171</sup>しかしそれは情勢一般の緩和ではなく、先に述べた華北の一般的大動搖の開始であった。

終りに、このような、考證的なような、また概観のような、蕪雜な一貫しない文を書いたことを恥じるのであるが、内外の著作の中に、この太平天国の北征軍という相當注意を惹く歴史問題に對し、史料の吟味も充分せずに都合のよい所だけ利用して曖昧な記述になったり、または基本的事項に誤りをおかしたりしている例も見るので、この小論がそれらを少しでも正し得たらと思ひ發表した。この論とて誤りは多いことであらう。啓發されることの多い先學の著作に感謝すると共に、大方の叱正をお願いする。

## 註

- (1) 太平天国方では「天京」と稱するが、この文では金陵とした。
- (2) 『李秀成自述』中國史學會主編 中國近代史資料叢刊 『太平天国』（上海 神州國光社 一九五二年）Ⅱ 八三八頁。（以下これを『太平天国』と略記する）。傍點筆者、以下傍點はみな筆者。

- (3) 『張繼庚遺稿』（『太平天国』Ⅳ 七六七頁）に、「其第一等壯勇已赴揚州、其第二等已渡河赴北」とあるが北征軍の多くは揚州から出ている。また「北征軍」か「北伐軍」の問題は自分北征軍とする。西征軍との語の関係からである。

- (4) 史料で人数の多いのは『亳州志』の「五月乙巳朔粵逆林鳳祥……等、率衆數十萬趨亳」（中國史學會主編 中國近代史資料叢刊『檢軍』（上海 神州國光社 一九五三年）Ⅱ 一一〇頁）。

（以下これを『檢軍』と略記）から、少ないのは、『欽定剿平粵匪方略』（以下これを『方略』と略記）にある、周天爵の奏言中の「……楊傑傳等供稱、正賊不過千人、裒脅雖有兩萬」（卷三十八 七丁）であらう。ただこの千人を採るのはあとに兩萬の數があるので問題は出よう。

- (5) 郭廷以『太平天国史事日誌』（臺灣商務印書館 中華民國五十四年版）二四八頁、同附錄八六頁。

- (6) 郭氏は、同前書二四八頁で、『方略』卷三十七 五丁、同卷三十八 七丁、卷四十三 二丁などを引用されている。

- (7) 簡又文『太平天国全史』（香港 簡氏猛進書屋 一九六二年）上冊五六四頁。Franz Michael, *The Taiping Rebellion*, Vol. 1 (University of Washington Press, 1966), p. 49.

- (8) *ibid.*, p. 49.
- (9) 羅爾綱『太平天国史稿』(中華書局 一九五五年版) 二八二頁。
- (10) 鄭純『太平天国官制軍制探略』(上海人民出版社 一九五八年) 六四頁。張德堅『賊情彙編』卷十一 賊數(『太平天国』Ⅲ 二八七頁)。また『向榮奏稿』中の「左二軍及各軍錯路」(同前 Ⅶ 一二六頁)、『黃生才供詞』中の「共帶十五軍人、是左一、右六……後九等軍」(『山東近代史資料』第一分冊 一九五七年版 一四頁)などの例から見ても判ると思う。
- (11) 華崗『太平天国革命戰爭史』(上海人民出版社 一九五五年版) 七一頁。あとで觸れるが、「有船千餘號」の出る史料には一萬の兵數は出ていない。
- (12) 戴逸『中國近代史稿』(第一卷) (人民出版社 一九五八年版) 二二〇頁。江地『初期捻軍史論叢』(三聯書店 一九五九年版) 三九頁。牟安世『太平天国』(上海人民出版社 一九五九年版) 一二九頁。王付孫『太平天國的北征』(『歷史教學』一九六二年第一期) 二六頁。復旦大學歷史系・中國近代史教研組『中國近代簡史』四八頁、などであるが、まだ他にもあるかと思う。
- (13) 牟安世氏、江地氏は『揚州禦寇錄』卷上(『太平天国』Ⅴ 一〇五—一〇六頁)の記事を挙げ、戴逸氏もほぼ同じ考えに立つかと思われる。ただ江地氏は浦口で他の部隊と接應した、とある點少しく異なるが、その人數は示されていない。
- (14) 謝興堯『太平天国叢書十三種』第一輯、十八丁。『方略』から一部引用すると、「又據探報、前月二十四日、又有賊船千隻、由湖口駛入江西、號稱二萬、合之現在攻撲江西省城之賊、當不下兩三萬人。是由揚州江南兩處竄出之賊、共計已有七八萬之多。『方略』卷五十一 六丁、七月十八日(八月二十二日)奏文(以下史料の日附は舊曆のままとし必要があれば括弧内に新曆月日を入れることとする)。これでは「號稱二萬」は實數かどうか判らぬし、「當不下兩三萬人」も確定數を意味してはいないであろう。
- (15) 范文瀾『中國近代史』(人民出版社 一九五二年版) 一一七頁。
- (16) 原典を未見なので、羅爾綱『太平天国史料辨偽集』(三聯書店 一九五五年版) 五六頁から引用すると、「秀清方專權、不納、以大綱老怯、乃命李開芳、林鳳祥率兵五萬北伐」とある。しかしこの『太平天国戰記』は、羅爾綱氏が偽書とされ、『太平天国資料目錄』一五八頁で偽託書とされている。范文瀾氏は、しかしこの書から五萬説を採ったらしいのは、「率兵五萬」の前の行に「羅大綱主張……『欲圖北』……」という、『太平天国戰記』と同様の文を用いていることから確定的と思える。
- (17) 曾根俊虎『髮賊亂志』一四頁、『通俗二十一年史』(早稲大學出版部 明治四十五年版) これは誤りもあるが、非常に詳しい所もある書である。特別な史料を著者は目にしているかと思われるがやはり通俗史といえよう。
- (18) *Michael, op. cit.* では特に少ない郭廷以氏の説を挙げた他には、一萬人、二萬人説などは無視されたい。
- (19) 簡又文『太平天国全史』上冊 五六三、四頁。ここで同氏

や他の學者も引用される、「有船千餘號」についてであるが、氏はこの史料から、郭廷以氏の二・三千人説を批判されている。千隻に二三千人が乗れば一隻二人になるという譯である（同、五六四頁）。それでこの點に關する史料を、いくつか書き出すと以下のようである。

十五日己丑、周天爵……奏言、據……稟報、揚州逃竄逆匪、有船千餘號、自儀徵・六合等縣江面竄至浦口。初六日有逆船數十隻、停泊浦口北岸、分路上岸竄擾。〔『方略』卷三十四 六丁〕

琦善又奏言、查四月初六日午時、浦口地方有賊船數十隻停泊北岸、分三路上岸竄擾。〔同 卷三十四 二十四丁〕

儀徵知縣都榮森稟稱、初七日申刻、探得有賊船六七百隻、由金陵順流而下、〔同 卷三十四 二十五・六丁〕

西凌阿奏言、……帶領黑龍江兵二千名行抵江南浦口、……防守。三月十八日等日有賊船數十隻泊岸、經臣等帶兵攻擊三次、四月初六日辰刻、突有賊船數千隻、賊匪數千名、各路攻撲。〔同 卷三十八 二十丁〕

これらを見ると報告に混亂が見られるが、千隻とも見られる船が浦口およびその附近に來たことは確實らしいが、千餘號全部が浦口に着いたのかどうか判らない。揚州方面からの多數の船は一部金陵に向ったとも考えられる、「是夕、鳳翔・以洗盡括城中資及婦孺送金陵、遂掠儀徵、糾賊二萬爲二十一軍以北犯。」〔『揚州禦寇錄』卷上（『太平天国』V 一〇五・六頁）の記事が頼れるとすると千餘隻の船の問題は兵數にすぐ結びつける理由はないと思う。西凌阿の奏言など敗戦の混亂をそのまま表し

ている。ここらあたり華岡氏や簡又文氏は考察不足でなからうか。

(20) 各軍を二萬とされる史料が示されていない。

(21) 『東洋學文獻類目』など見た限り他に出ていない。

(22) 氏の文を引用すると、「他（張維城）在自述中說；在懷慶者共有九軍……前一……右一。此九軍皆從揚州出來。」王淑慎『太平天国北伐人數問題』（光明日報一九六三年一月三十日）とある。

(23) 羅爾綱『太平天国史稿』一三五頁。ただし、この形式自體がどうこうというのではない。

(24) 王淑慎前掲論文。ただその上の十一萬八千三百九十四人という人數は、一軍一萬三千一百五十六人とした場合、九軍の數として合わない。計算違いであらう。

(25) 『垣曲縣志』卷之四、兵防。また前出（註4）『亳州志』の人數は明確でないので、王氏は無視されたのであらうか。

(26) 『癸丑中州權兵紀略』（『太平天国』V 一七四頁）この書は體驗記であり、實感がよく出ている。記事が正しいかどうかは別として見聞したことをそのまま記録したといえよう。

(27) 陸應穀又奏言、逆賊自揚州竄出以來、在事諸臣、皆以爲僅一二千人無足爲慮。臣在歸德、以數千之師、與賊轉戰三日、親見賊匪、以數百人爲一隊、有進無退、又往往從後抄襲、其由亳至汴者、約計在數萬以外。〔『方略』卷四十二 十二・三丁〕

(28) 同前 卷四十二 六丁、同 二十丁。

(29) 粗雜な計算であり、「溺死者無數」などの無數は多くの場合

虚飾の語のようなので除き、おおまかな計算に過ぎぬが、歸德方面から天津附近に達するまで、計一萬八千人など、天津附近から馮官屯の覆没まで二萬人餘、の捕虜と死者であり、他に降服者が三千餘人ある。正確な数とはとてもいえぬが一つの目安にはなるかと思う。

- (30) 賊匪初竄浦口、不過二三千人、沿途裹脅勾結、不止倍於正賊。『方略』卷三十七 五丁)

近復有慮・鳳等處居民、被賊裹脅、新經逃出者(同 卷三十九 二十六丁)

該逆到處、裹脅愈聚愈多(同 卷五十七 三丁)

至八月賊由濟源一帶竄垣、聲勢猖獗、焚燒廟宇、掠人畜無算。『垣曲縣志』卷四 十八丁)

など例は多い。

- (31) 「登時殺斃長髮賊二百餘名、短髮賊三百餘名」(『方略』卷四十六 三十一・二丁)「斃賊二百餘名、內有長髮賊五十餘名」(同 卷五十一 五丁)「擊殺長髮賊五六百名、半長髮賊五百餘名、逃散裹脅百姓二千餘名」(同 卷五十九 二丁)これらの記事の前の二つは黄河を渡らずに南返した軍のものであり、あとの一つは、直隸省・冀城近くの戦いの記事である。他にも「又殺長髮賊百餘、短髮賊二百餘」(『豫軍紀略』卷一「擒軍」II 一六二頁)など、どこまで信憑性があるか問題はあろうが、これらで見える限り、強制、非強制はさておいて、あとからの参加者数は、出發當初の人数を上廻ることを推定させる。

- (32) 十四日甲申(一八五四年一月十二日)勝保奏言、逆匪占踞靜海、獨流之時、老賊及裹脅者、不下數萬人、騎馬賊目約

有數千。自臣等攻勦以來大小數十數戰、殲斃解散已有十之六七。……查兩處賊衆不能過萬。……(『方略』卷七十二 二二・三丁)

これは残った北征軍を過少に報告しているが、さほど虚飾の強い報告ともいえないと思う。そこでこの數萬を三萬乃至多くて四萬と見てよいことは、文脈から見て明らかである。また前註(29)の天津以降の戦死降服の計約二萬人餘は幾分少ないことになるが、「直隸・山西省被脅之衆、經臣設法解散、日來逃出甚多」(同前 二十三丁)など考えると大體の數は合うかと思う。

- (33) 「賊情突纂」卷二(『太平天国』III 五三・四頁)『平定粵匪紀略』(上海申報館版)卷二。

(34) 哈喇(Jindley)『太平天国革命親歷記』上冊 一一八頁(原文未見、中國譯に依る)

- (35) 「小卑職林鳳祥、李開芳二人帶五軍(軍)兵將連夜先往黄河四十里之遙、上下取船只」(林鳳祥李開芳吉文元朱錫銀北伐報告跋)『羅爾綱「太平天国史料考釋集」 一二一頁。車を軍としたのは簡又文氏の讀みに依る)の分軍が五軍であれば他の軍が一軍とは考え難い。

- (36) これらは、(a)『平定粵匪紀略』卷二。(b)『揚州禦寇錄』卷上(『太平天国』V 一〇六頁)(c)『豫軍紀略』卷一「擒軍」II 一五九頁(d)『山東軍興紀略』卷一之上「擒軍」IV 三頁)などに出ているが、(b)、(c)、(d)は同じ系統の史料に依ったか、他を引用したのではないかと思われる。

- (37) 「黃生才供詞」前註(30)參照。『粵匪南北滋擾紀略』(『山東近代史資料』第一分冊 一八頁)、『山東軍興紀略』卷一之中



- 『拾軍』Ⅳ 一一頁) など。
- (38) 「洪秀全傳」、『清史稿』(香港 文學研究社版) 一四五八頁上段。簡又文、前掲書、五六三頁より得た。
- (39) 『向榮奏稿』 卷二(『太平天国』Ⅶ 八八頁) 向榮は四月十九日(舊三月十二日) 以前にこのことを知っていたのであるし、現地の清軍は北進の動きを感じていたことは確かである。
- (40) 「黑龍江官兵六起已到浦口」(同前) とある兵は、『方略』 卷三十一 二十九丁、同 卷三十八 二十丁の「黑龍江兵二千名」であろうが、或いは清方としては相當數と考えていたかも知れぬ。
- (41) 『向榮奏稿』 卷三(『太平天国』Ⅶ 一一九頁)、『方略』 卷三十四 六・七・八丁、同 卷三十八 二十丁などの記事を見ると北征軍は浦口へ一舉に上岸したのではなく、主力が五月十三日に浦口および附近に上ったものといえよう。
- (42) 『方略』 卷三十六 二十五・六丁。
- (43) 『咸豐朝東華錄』(以下『東華錄』と略記) 卷二十二 四月庚寅の條。『方略』 卷三十五 八・九丁。
- (44) 『方略』 卷三十四 十一丁。
- (45) 同 卷三十五 九丁。
- (46) 同 卷三十五 十四丁。このあたり清廷は、現地軍の報告の不確かさもあってか、北征軍の動向をよく把握していないようである。
- (47) 『方略』 卷三十六 二十五丁に、臨淮關、淮河北岸邊で鄉勇と少し戦ったことが出ている。
- (48) 周天爵奏言、臣前聞賊警時、即於渦河邊築戰牆一道、並營壘三座、。孰意四月二十一日(五月二十八日) 賊破鳳陽、二十六日由僻道直趨懷遠、搶渡渦河焚掠、二十八日賊聞臣帶兵在在途、恐被追及、即於是夜、舍舟登陸、西走蒙城。(『方略』 卷三十八 五丁)。
- (49) 『豫軍紀略』 卷三(『拾軍』Ⅱ 一九二頁)。
- (50) 『癸丑中州罹兵紀略』(『太平天国』Ⅴ 一七三頁)。
- (51) 『永城縣志』(『拾軍』Ⅲ 一八頁) 註(50)に同じ。
- (52) 同。
- (53) 『方略』 卷三十八 五・六丁。
- (54) 簡又文前掲書 五六九頁。
- (55) 『方略』 卷三十八 二十五・六・七丁、卷三十九 二丁、同十七・八丁。
- (56) 同前 卷三十九 二丁では「先派一萬、同十七丁では「已有賊匪數千占住」とあるが、一萬以下と見ていいのでなからうか。
- (57) 『方略』 卷四十二 二十丁。『東華錄』 卷二十三 五月丙寅の條。羅爾綱『太平天国史料考釋集』 二六頁。
- (58) 「賊匪圍攻省垣、疊次擊退後、於十六日(六月二十二日)、仍分起自東南來。臣等督飭兵勇、緹城而下、殺斃數名、生擒數名、並於城外間房內、搜獲十餘名」(『方略』 卷四十一 二十三丁)の程度で、疊次擊退は城壁から砲撃したぐらいのことであろう。開封の攻撃については、『豫軍紀略』 卷一(『拾軍』Ⅱ 一六〇頁)、『山東軍興紀略』 卷一(『拾軍』Ⅳ 四頁)、『癸丑中州罹兵紀略』(『太平天国』Ⅴ 一七四頁)、『盾鼻隨聞錄』 卷四(『太平天国』Ⅳ 三八五、六頁)、『粵匪南北滋擾紀略』

『山東近代史資料』一六頁）などに出てゐるが、いずれも具體性に缺け荒唐に近いものもある。

59 「並據該犯供稱、賊匪商議、如得渡黃、即行北竄、如不得渡、仍回長沙等語。查該犯自朱仙鎮起身時、賊匪尚在彼處占踞。」

『方略』卷四十五 十三丁の「回長沙」は渡河せぬ時に西征軍との合流を意味しているのだろう。また、「林鳳祥李開芳吉文元朱錫銀北伐報告跋」（前掲、一二二頁）の「至今在朱仙鎮酌議起程過去黃河、成功方可回稟各王殿稟安」を見ると當時増水中の黃河を渡れるかどうか、不安はあつたと思われる。

60 『方略』卷四十三 二十一丁、同 卷四十四 一・一二丁。

『東華錄』卷二十四 六月乙亥（七月七日）の條に「在鞏縣趙莊等處、搶船行駛」とある。洛河で入手した船で、洛河が黃河に合流するあたりで本軍の渡河を始めたかと思われる。それから「煤船」は石炭の類を輸送する小舟と思われる。「洛河舊有民舟運煤糧上下、賊掠以渡。至中流、水暴長舟覆、溺死無算」『豫軍紀略』卷一（『捻軍』Ⅱ 一六〇頁）はその舟の性質を示している。

61 『東華錄』卷二十四 六月壬午の條。

62 『方略』卷四十五 十九丁。

63 註60參照。

64 『方略』卷四十四 一二丁。

65 「賊於二十一日、由汜水縣小口、先令數百人渡河、搶船全股渡河等情」（同前）とあるが、全股渡河という點も違つてゐるし、このあたり具體的なことは判らない。

66 『方略』卷四十五 二十五丁。

67 『盾鼻隨聞錄』卷四（『太平天国』Ⅳ 三八六頁）。この著書はいわゆる稗史野乘の類いで、信をおき難いが、問題について一應考えてもいいかと思う。

68 「此股賊匪雖屬敗竄、而餘氛尤足蔽日。」癸丑中州罹兵紀略

『太平天国』Ⅴ 一七五頁

69 「未渡河者尚有千餘人」（牟安世前揭書 一三〇頁）、「吉文元所部尚有千餘人」（江地前揭書 四三頁）、「約三分之一的兵被追南走」（四、五千人程度を想定か）（戴逸前揭書 二四二頁）、「約四千人」（郭廷以前揭書 二六一頁）、「當有三三萬人也」（簡又文前揭書 五八五頁）などある。

70 「並鞏縣折回賊匪三四千名、均歸入汜水縣城內、……共殺賊二千餘名、……生擒長髮賊五十餘名、……訊明正法」（『方略』卷四十四 十一・一二丁）この二千餘名中にはいわゆる新襄陽者が多いのではないかと思うが、それはとにかく、『方略』でのその後の南返軍の戦死者數は「投河無算」など除き、二千五百名ほどである。また南返軍が、河南省の新鄭から許州に至るころ、「爲數不過二三千人」（同前 卷四十六 六丁）とある。

71 「將全股賊匪、撲滅殆盡」（『方略』卷五十二 四丁）とあるが、戴逸氏、江地氏はこの史料あたりに依つてゐるかと思う。牟安世氏は無造作に西征軍の胡以晃の軍と合した、とされる（牟安世前掲書 一三〇頁）が、従いかねる。

72 「將城外所蓄沁水盡行放洩、以期必得」（『方略』卷四十六 一丁）とあるが、城壁爆破などの準備のためだろう。

73 『方略』卷四十六 三三丁。『東華錄』卷二十四 六月己丑の條。

- 74 『方略』 卷四十七 二十九丁。
- 75 簡又文氏は要地説（前掲書 五八八頁）、牟安世氏（前掲書 二二一頁）、戴逸氏（前掲書 二四二頁）は殷實、火藥説、といったところである。
- 76 前掲の『粵匪南北滋擾紀略』や『豫軍紀略』、『盾鼻隨聞錄』、『癸丑中州罹兵紀略』などに同様な記事が出ている。
- 77 「林鳳祥李開芳吉文元朱錫錕北伐報告跋」（羅爾綱『太平天国史料考釋集』 二二二頁）。
- 78 『盾鼻隨聞錄』（『太平天国』Ⅳ 三八七頁）信じ難い書であるが、渡河の事情から考え、この記述のようなことはあったと思われる。
- 79 『方略』 卷四十八 七丁。
- 80 「據盤獲奸細供稱、逆首偽丞相林瀾詳、志在四面圍困、待懷慶城中糧盡、斷無難破等語」（『方略』 卷四十八 十三丁）。
- 81 『方略』 卷四十九 二十一丁、卷五〇 九丁、卷五十二 十二丁、などに各地からの増強を記している。
- 82 「卒至全軍覆沒、而其失敗之原因蓋肇於是役也。李・林……殆皆戰將之才而非主帥之器歟！惜哉惜哉！」（簡又文前掲書 五九五、六頁）とあるのは適評に幾いといえよう。江地氏（前掲書 四八頁）も同様な意見である。
- 83 『方略』 卷四十 十八・九丁。
- 84 同 卷四十七 一二丁。
- 85 「賊自安徽竄河南、破歸德、圍開封、所過州縣望風奔潰、大河南北無堅城矣。倘倍道疾馳、兼程北竄、各處重兵徵調不及、幾輔重地、必致驚惶莫措、難堪設想。……始知懷慶一城所關極大。」『盾鼻隨聞錄』（『太平天国』Ⅳ 三九〇頁）とその著者が當時において、懷慶攻防戦の重要性を見ていることが判る。しかしこれらが華北一帯の崩壊に繋り、北京が陥ちることになったとはいえないだろうと思う。理由はまた後に觸れる。
- 86 「而南阻黃流、北限太行、東懾重兵、惟西路黃河太行間有仄徑、賊乃潛趨山西」『山東軍興紀略』 卷一（「捻軍」Ⅳ 七頁）「時東北・西南、皆我軍壁壘」『豫軍紀略』 卷一（「捻軍」Ⅱ 一六一頁）
- 87 『方略』 卷五十一 三十一丁に、北征軍が攻勢に出たと思われる例がある。
- 88 「（七月）初四日丁未、訥爾經額・托明阿奏言、本月二十三日、內閣學士勝保督兵趕到、臣等遂商定、合兵一處、分路進剿勝保攻其東南、臣托明阿……西凌阿攻其東北兩面」（『方略』 卷四十八 十二丁）
- 89 『方略』 卷四十五 二十六丁、卷四十六 一二丁。
- 90 同 卷四十八 九丁。
- 91 同 卷五十一 十一丁、など。
- 92 同 卷四十九 二十丁。
- 93 同 卷五十四 二十四・五丁。
- 94 「兵力不爲不厚、而我軍紮營、距城每在三十里二十里之遙。外援雖多、與城內隔絕、何能約期並舉、內外夾擊、力解重圍。」（『方略』 卷四十七 二十九丁）といった陣容で戦っていたものと思われる。
- 95 『方略』 卷五十四 五丁、十三丁、二十三丁、卷五十五

七丁などで、清廷は、追撃、防禦の不備につき、軍、地方官への叱責の語を下している。

006 『粵匪陷臨清紀略』（『太平天国』 V 一八四頁）。

007 「山西素鮮土匪、逆匪驟難煽脅。惟民情素懦、重身家、而怯戰鬪」（『東華錄』 卷二十六 八月庚辰の條）

008 「賊至洪洞時、趙城各村鎮、先爲賊送贏馬米糧、霍州城門大開、人民逃散、紳衿備糧石以待賊。是山西不但兵無可恃、人心亦渙散堪虞。」（『方略』 卷五十五 十一・一二丁）といった状況はあったかも知れない。

009 「勝保奏言、……臣思該逆始而竊竄、桀悍之徒不過四五千、……今沿途襲脅、又已過萬、……訊供、欲由山西、乘虛直犯京師、是以所破城池、不願固守。」（『方略』 卷五十五 九丁）、「且該逆到處、裹脅愈聚愈多」（同 卷五十七 三丁）などそれを示すといえよう。

000 「茲據東明縣知縣丁學易摺獲奸細陳登心解省訊供、係賊營偽官。誠恐同來夥黨不止一人」（『方略』 卷五十六 十三丁）の確否は判らぬが、本軍が山西にいるころ、山東、河南の交界方面に偵察者または内應者がいたとすれば注目すべきである。

001 勝保又奏言、盤獲奸細供稱、賊由洪洞探路、欲至山東東昌、及天津一帶」（『方略』 卷五十八 二丁）「僧格林沁又奏言、據該鎮逃出難民聲稱、賊匪向問天津道路等語」（同 卷六十二 二十丁）

002 上諭內閣曰、……近畿一帶大兵雲集、……京師十萬禁兵、均已簡調齊備」（『方略』 卷四十 二十一丁）は誇示的文にせよ、その勢力の侮り難いことを示しているよう。

003 「籍步兵四十萬、馬兵六十萬、兵政侍郎楊王休爲都肄、出橫門、至渭橋、金鼓動地。」（『明史』 卷三百九 李自成傳 百納本列傳十九丁）この文の内容が正しいかどうか別として、このような状況になって北京が陥ちたことは考えねばならぬだろう。

004 牟安世前揭書 一三一頁には、北京がパニック状態に近かったから、直ちに北京方面に赴かなかったのは惜しまれる、とあるが、北征軍の當時の勢力、また後出の氣候、環境からは北京の攻圍は無理といえよう。

005 『方略』 卷六十一 二十一・二丁。同 卷六十一 七・八丁。

006 簡又文前掲書 六〇七頁では戦力の弱化を言っている。

007 「由賊營逃回之張生等據供、賊目林姓、李姓、姬姓三人、並稱賊皆習教。其由山西竄至直隸、意欲在天津衛營等供。臣素知天津一帶習教者甚多。逆匪既有欲赴天津之說、難保不勾結內應。」（『方略』 卷六十一 五丁）文中の「姫」は「吉」ではないかと思われる。それはとにかくこの場合北征軍の習教の意味は問題はないが、天津の習教者の場合、キリスト教徒を指すのか、それとも白蓮教系統を指すのか判らない。

008 『東華錄』 卷二十四 六月己丑（七月二十一日）の條。

009 「今秋雨水較多、永定河決口地方復被水」（『東華錄』 卷二十八 十月甲戌の條）「本年秋雨過多、附近州縣四面皆水、到處可通舟楫」（『方略』 卷六十一 二十二丁）

010 『方略』 卷六十一 二十六・七丁。

011 「賊意本欲北擾、現因大兵漸集、屢受懲創、賊膽已寒。況天津四圍皆水、防衛又嚴、恐其卽由交河一帶、南竄山東」（『方略』 卷六十一 二十九丁）

012 『方略』 卷六十一 二十四・五丁。

013 「他們喪心昧良地掘開運河堤岸，使運河之水大至環城數里」

(戴逸前揭書 二四四頁)と天津圍練などで運河の隄を斷つて天津四面に水を環らしたように出ている。

014 「文謙……奏言、本月二十八日已刻逆匪竄至天津離城十里、午刻分股直撲開放槍礮。臣等督飭兵勇槍礮齊施，直至亥刻賊衆始退。傷斃逆賊約二百餘人，斬獲首級二顆。……臣張起鵬回天津城內，彈壓以防內患」(『方略』 卷六十二 二十一・三丁)や「臣等雇派在河溝暗伏之雁戶、排槍迎擊。賊疑漁船，欲行槍渡，該雁戶隨即開槍，擊斃數十人。」(同 卷六十三 六丁)とある程度と思われる。

015 『方略』 卷六十三 三十丁、同 卷六十四 十一・二丁では、天津に近い楊柳青でも清軍の砲撃で撃退された様子である。

016 『方略』 卷六十三 二十一丁、卷六十四 一丁に、木城の造營を始めている記事が見える。

017 「京師自七月以來雨水過多、……而秋收未免歉薄。糧價稍昂，貧民度日維艱」(『東華錄』 卷二十六 八月丙戌の條)

018 「至靜海城外駐紮，附近村莊，非被賊擄，即爲水淹。人馬斷糧絕草者三日。」(『方略』 卷六十三 三十一丁)は誇張があるにしても糧食に不足したとはいえよう。

019 牟安世前揭書 一三三頁。戴逸前揭書 二四五頁。簡又文前揭書 六一八頁など、食糧不足のことに言及。また「逃出回營，詢知賊營糧米已不甚多。又經該勇黑夜乘風放火，將其裝麥船焚燒七隻」(『方略』 卷六十七 二丁)と天津鄉勇を北征軍に潛入させた結末を勝保が奏言している。

020 註参照。

021 「四面皆水、無安營之所」(『方略』 卷六十八 五丁)となる原因を「該逆決隄放水，護繞賊營，使我兵不能進戰」(同前)

との勝保の奏言は、どちらが隄を決したのか判らない。開封では清方の危惧にも拘らず黄河を決していない。この開封と黄河の問題にいま觸れる餘裕はないが、李自成の場合黄河を決している。北征軍の性格を考える場合意味のあることと思う。

022 「咨令慶祺進駐獨流西北，傍水紮營，用礮轟擊、……現又調八千斤・五千斤大礮二尊，由水路運至大營，以備攻礮木城之用。」(『方略』 卷六十四 二十二丁)と北征軍が紮營後間もなく大型砲を動員している。

023 「再將天津海口七千斤至萬斤大礮，運至營中，此礮力能致遠，若高築礮臺，向內攻擊，或傾覆賊巢。」(『方略』 卷七十三 十二丁)。

024 「惟賊勢雖極窮蹙，尚有五六百斤礮位三十尊，擡槍鳥槍數百桿。」(『方略』 卷六十五 二十一丁)。

025 「開放連環槍礮，擊死該逆大半、……臣復令開放連環大礮，將其木城屋宇，擊破十數處。」(『方略』 卷七十 三十四丁)「訊據逃出難民供稱，自築礮臺後，礮子打入賊營，傷斃不少。雖老賊亦未嘗不心膽俱寒，無可爲計。」(同 卷七十二 二十三丁)「又因礮臺連日用大礮，向賊壘轟擊，斃賊甚多。」(同 卷七十三 二十二丁)など、それを示しているよう。

026 「上十一月二十八・九兩夜，該逆屢次搶撲、……初一日、……大股擁至，齊拋火彈，直至新礮臺脚下，舍命很撲、……並飭吉林・黑龍江及蒙古馬隊、……抄擊，該逆始敗退回巢」(『方略』

卷七十一 一十七丁)。

〔註〕參照。

〔121〕『方略』卷七十六 二十二丁。また「冰雪寒塗、賊<sup>くわんく</sup>多死、能行者手足<sup>こころ</sup>滲<sup>こころ</sup>沫、委棄兵仗。」「山東軍興紀略」卷一(『拾軍』

IV 九頁)はその苛烈さを示しているよう。

〔122〕『方略』卷七十四 二十三丁。

〔123〕前掲『黃生才供詞』一〇頁。

〔124〕「查阜城城內、房屋無多、積水之處、十居八九」(『方略』

卷八十一 十三丁)。

〔125〕「現已挑築長壕、密布樹柵、該逆兩次衝撲、未能竄出」(『方略』卷八十一 二十五丁)。これで見ると、北征軍は時期を失するとここに閉じ込められたかも知れない。

〔126〕『方略』卷八十 十八丁。

〔127〕同 卷八十ごろから屢見する。

〔128〕「上命軍機大臣、……但據王明等面奏、僧格林沁曾帶親兵數人、輕騎誘賊、爲賊匪大股抄圍、勢甚危、大兵隨後趕到、始獲全勝。」(『方略』卷八十九 十丁)

〔129〕「於五月初二日、帶騎馬賊二千餘名、從正東突出、由寧津大路分竄」(『方略』卷九十二 八丁)。郭廷以前揭書 三二二頁。

〔130〕「並見多賊棄刀下馬長跪道旁」(『方略』卷七十五 二・三丁)これは勝保の告示を見たためと思われる。

〔131〕「若如勝保告示所云、臨陣棄械、道旁長跪、即可免在資遣、毫無稽察、設被奸匪漏出、豈又墮奸計耶」(『東華錄』卷三十 咸豐三年十二月甲戌の條)

〔132〕『方略』卷七十七 十三・四丁、同 卷七八 八丁。

〔133〕「近來陸續投誠人衆三千餘名。臣察其並無異心、酌量收錄、

於圍限以內屯紮、打仗亦頗得力」(『方略』卷一百十八 一丁)

〔134〕「諭本日據官文奏、投誠毛勇恐其生變回竄河南、請飭防堵等語。已諭令西凌阿妥爲駕禦矣。此項義勇前由馮官屯赴楚道、經河南、路徑熟悉。見因官軍失利、投入賊營者、已有六百餘名之多。若輩狼子野心、萬一引賊北竄、亦不可不防」(『東華錄』

卷五十 咸豐五年七月乙酉の條)とあるのがこの降服者たちであらう。また、「已密咨……嚴加防範、伺便即聚而殲旃、自保爲亟除內患起見。惟該義勇、除投誠外、尙存二千餘名、人數衆多、殲除未易、儻因機事不密、竟致倒戈、爲害非細、……其願

歸田者、即行資遣、……自可逐漸解散、其心懷叵測、得有實據者、即行正法、以儆其餘。」(同前)と下令している。勝保の「資遣」の告示も結果的には欺瞞になったといえよう。

〔135〕「該逆突出四五千名、直撲南面、係奪路奔逃、與臨清之賊、互相勾結。」(『方略』卷八十七 二十八丁)

〔136〕「訊據供稱、僞丞相林源詳、帶騎馬賊一千名逃竄、欲往臨清迎接南來賊匪。」(『方略』卷九十二 十一丁)これの五月二日(五月二十七日)より、一ヶ月以上前の三月二十六日(四月二十三日)ごろに北征援軍は臨清で敗退している。

〔137〕『方略』卷一百十三 四丁。

〔138〕同 卷八十六 十五丁、同 卷八十七 十二丁。

〔139〕「二十二日要出城上阜城去打救舊兄弟、因爲官兵人多、害怕不敢前進。」(前掲『黃生才供詞』十三頁)、「于二十八日夜深、……官兵奔避、賊見火熾兵潰、曾立滄謂黃、陳、許等曰、趁此追殺、不難將官兵一網打盡、從此返轍往北、直抵阜城絕無阻滯、

乃轉敗爲勝之機也。黃生才亦以爲然、無如許、陳以下衆賊目堅不相從、曾、黃俱不能制、徒爲之長歎不已。(前掲『粵匪南北滋擾紀略』二二頁)は前後關係や、信憑性に問題はあるが、援軍の内部状態を示すものであろう。

(147) 「目下之計、自以退其北竄、爲第一要務」(『方略』卷八十七 十五丁)との勝保の奏言は清廷で譴責されていない。

(148) 「十五軍」は問題ないと思うが、兵數はよく判らない。「帶領十五軍、每軍五百人、共七千五百人」(前掲『粵匪南北滋擾紀略』一八頁)はやや少ないように思われるが、それに近い數であらう。「探聞賊衆約有三萬人、粵匪數不盈萬、另有潰勇四五千人、投入逆黨、係李三開爲首、餘皆安徽捻匪、被粵匪邀結而來。此股賊匪、自豐工渡河、分三股北竄、至張秋、合爲一股、疾趨千餘里、屢陷城池、衆至數萬、聲言救援阜城賊匪」(『方略』卷八十四 二十六丁)とあるのが援軍の數と行動を比較的よく表わしているよう。

(149) 『欽定剿平捻匪方略』を見ると、咸豐三年七月ごろ以降になると、捻黨の蜂起者の人數と集團數が多くなることがよくわかる。「九月……陸應穀奏言、歸德自被逆賊竄擾後、各處捻匪乘機肆起、鐵擁搶劫、勢甚披猖」(卷四 六丁)「查阜邑(潁州)境內、匪多如蝟、大小各股不下三萬餘」(同 六丁)「此次合五十八股爲一捻」(同 十七丁)など擧げるに勝えない。

(150) 前掲『粵匪南北滋擾紀略』二二頁、戴逸前掲書 二四七頁。「十六日賊自丑刻入城、大肆焚殺、……二十一日夜賊督忽自驚擾、潰出者數千人。」(『太平天国』V 一八一・二頁)を見ると、北征軍の行動と異なり、全くの流賊的である。指揮者の

統制力もないと思われる。前掲『黃生才供詞』などから判斷すると黃生才らは城外にあって、新附の捻黨らに城の攻撃に當たせただのではないか、とさえ思われる。

(151) 註(3)参照。

(152) 「安徽人鍾有年帶領捻匪水手九十一名出降……主謀劃策、與林逆同惡相濟……九十一名全行正法」(『方略』卷一百十八 二丁)と他の出降者と異なり殺されている。

(153) 「賊勢雖衆、其中長毛真賊不過三分之一、餘皆裹脅土匪」

(『方略』卷八十四 十七丁)や「匪衆雖至三四萬、其中多係裹脅之人」(同 三十八丁)とあるところであらう。

(154) 註(2)参照。

(155) 「和春・福濟又奏言……於六月十五日(一八五四年七月九日)移紮距舒城二十里之白洋鋪、十六日督兵在連三橋一帶迎剿賊匪、三面夾攻、匪衆敗走……十七至二十七等日、復於楊家店・五里橋・王家店等處、疊獲勝仗、斬賊甚多。」(『方略』卷九十八 二十丁)とあるのがそれであらうか。

(156) 郭廷以前掲書・附錄 八六頁。簡又文前掲書 六五九頁以下范文瀾前掲書 一一八頁など。

(157) 「立有僞王僞官名目、留髮易服、衆至萬餘。兇勇鬼蜮、實爲廣西腹心之患。若將此股即時殲除、其各股土匪不難分投剿洗、次第撲滅」(『方略』卷四 十八丁)と五年五月になってこのように報告されているが、當時の欽差大臣李星沅は、道光三十年十二月二十日に「金田村賊首韋正・洪秀全等私結向弟會、擅帖僞號僞示……」(李星沅奏議(羅爾綱『太平天国史事考』北京 一九五五年版 一五頁より引用))と、早くからそ

の叛亂の性格を上奏している。

(59)

ここは論議の出るところであるが、宮崎市定「太平天国の性質について」(『史林』第四八卷第二號、後、『宮崎市定 アジア史論考』下巻、朝日新聞社刊 四一〇頁以下に再録)中の論に傾聴すべきものがある。氏は廣西あたりの動搖の原因を、アヘンの密賣買に關聯ありとし、それが不振となって遊民、反社會的集團が暴動、掠奪などを行なうようになった面がある、と主張される。文中一部引用されているが、「據稱近日盜匪之多、莫如兩廣、一日擄人勒贖、一日分界打單」(『東華錄』卷三 道光三十年六月己卯の條、分界打單の意味が淺學のため判らぬが、繩張り内でゆすり恐喝行爲をすることであろうか?)このようなやり方は當時華北の捻黨などに見られる、いわゆる會黨の行爲である。ただ氏が太平天国について評價をやや低くされているように思われるのは、自分と考えが異なる。『太平天国革命性質問題討論集』(三聯書店 一九六一年北京版)に見るように理論が先走りするの必しも自分の考えと一致するわけでないが、會黨が蔓延する社會、それは一般民衆にとって不幸な政治に由來するものであり、そのような社會、政治の不健全さを正すことを初期の太平天国は少なくとも表面的理念として掲げ、それに民衆が應じたことは無視できない事實であらう。「吏役四出、晝夜追比、鞭朴滿堂、血肉狼籍、豈皆酷吏之爲哉」(曾文正公全集 曾文正公奏稿 卷一「備陳民間疾苦疏」咸豐元年十二月十八日)と曾國藩が經濟事情の惡化を説く時、彼の目はその朝廷の政治自體にどう向けられていたであらうか。

(60)

この亂についての中國人の論文名を目にしたことがあったので『東洋學文獻類目』の昭和二十五・六年以降のものに目を通したが見落しか未見に終った。亂の經過は、『宣宗實錄』卷四百七十四ごろから、『文宗實錄』卷八ごろまでに詳しい。

(61)

『方略』卷一 二十三丁。具體例は、簡又文前掲書 一七八頁以下に詳しい。

(62)

「去年粵逆入楚、凡入添弟會者大半附之去、然尙有餘孽、未盡此外、又有所謂串子會・紅黑會・半邊錢會・一股香會、名目繁多。」(曾文正公全集 曾文正公奏稿 卷一「嚴辦土匪以靖地方摺」咸豐三年二月十二日)。

(63)

「周天爵奏言、逆匪竄入長江、……如入無人之境。其故賊踞上游水陸並進、蔽江而下、我兵以下游當之、無不立破、此形勢之一誤也。……洞庭長江上下木簑船隻、俱爲賊有」(『方略』卷二十八 九丁)また「周天爵奏言、訪聞、逆賊現用木簑輔舟、舟行中流、簑行傍岸、上堆泥塚、槍礮遮列四面、直若無基之城。」(同 卷二十四 二十五丁)といった戦法も用いられたかも知れぬ。

(64)

「又聞賊匪潛來內地、其衣服髮辮間、暗有記號、……嚴密稽查、儼有形跡可疑之輩、立即嚴行搜捕、勿令匪徒潛跡其間。至擒匪鹽梟、所在皆有、必須設法鈴制、以免勾結」(『文宗實錄』卷七十七 二十三・四丁、咸豐二年十一月辛未の條)のように太平天国方は北方との連絡を圖っているが、「賊踞長江、其奸細徧地皆有、……凡有荆楚人口音不對者、概行禁止渡黃」(『方略』卷二十六 十四丁)とか「難保無奸匪改裝易服潛跡偷渡、……如遇楚粵口音、更須加意嚴查」(同 卷八十 十一丁)は



北征軍が北方に孤立した場合、特に不利になったであろう。

065 「山東省審判、結捻・結幅・強劫詭搶匪犯、以人數多寡、定罪名之輕重、已於道光二十五年立有專條。尋奏……如有結捻結幅、聚衆至四十人以上、帶有軍器、強當訛索得財。不論贓數多寡、首犯擬絞立決。四十人以下十人以上、首犯擬絞監候、爲從均發新疆」(『文宗實錄』卷五十二 咸豐二年正月丁卯の條)と舊法令を持ち出して彈壓強化を始めている。

066 「周天爵奏言、……臣尤慮、豐工堵築、土夫・雜人・災民・梟・捻、聚衆數十萬。設一旦伺釁而動、則山・江・皖・豫強悍之徒、勢將裹脅而起。所以招募團練者、卽所以收拾人心也。」「方略」卷二十六(二十一丁)と團練の必要性を上奏している。ただ天津の場合など團練が功を奏しているが、臨清の場合腹返りがあったらしい。二面性はあったと思う。

067 「臣因兵力太單、兼之官兵於冰雪之中、目不交睫者數日、未免勞苦。是以亟盼勝保・保慶等策應」(『方略』卷七十六 二十六丁)は獨流・靜海から河間東城邊の戦いの場合、「上命軍機大臣……見在僧格林沁業已先督馬隊追擊、何以勝保僅督後隊繼進。前次賊由獨流竄出、經僧格林沁痛加勦洗、勝保耽延數日始行趕到。」(同 卷七十九 十丁)また連鎮の戦に際し「軍中晝則肝眠番榻(あかがりきらしして土はこび)、夜復戒備站隊、體甚、王令駭、且躬自巡徼、莫敢違者。」「山東軍興紀略」卷一(『捻軍』Ⅳ 一二頁)などは彼の精勵さを示すといえよう。「初九日善(祿)兵出隊去賊里餘、施放槍礮而退、……十二日勝・善兩營由城西北出隊、各施槍礮而退」(『粵匪陷臨清紀略』(『太平天国』Ⅴ 一八〇頁)また前出註04参照。

069 「僧格林沁奏言、……林逆亦深知人心不固恐生他變、遇有投出之人、被該逆擊回、不但<sub>レ</sub>不加殺害、且自責無能以致衆人受困、給豫銀兩、仍令投出。該逆當此萬分窮蹙之時、尙能如此。狡猾實非尋常賊犯可比。」(『方略』卷一百十五 一・二丁)と僧格林沁も彼の度量を認めている。

070 羅爾綱氏は、明史・太祖本紀を引き、「中原を定めて」から北京を攻めた太祖の方針を正しいとして、「以偏師北伐、孤軍深入、怎麼能不<sub>レ</sub>免於失敗」(『太平天国史料考釋』一二九頁)とされる。その意味では西征軍に先ず主力を投入すべきであった、といえよう。後年の安慶の失陥が金陵失陥につながって行くことを考えてもわかることである。

071 太平天国軍が湖南に進出するころから、清廷の諭令に以下のような語が頻出する。「朕心實深焦灼」(『東華錄』卷十六、以下『東華錄』卷數のみ)、「朕每披警報、焦灼萬分」(二十二)「覽奏、彌深憤懣」(二十二)「覽奏曷勝焦急」(二十四)「朕心實深懸繫」(二十四)「朕宵旰焦勞」(二十七)、「朕心焦慮時深」(二十七)、「數日未見奏報、焦急殊深」(三十二)と多様な文句が出るが、北征軍の覆没後そのような語は甚だ少なくなる。北京は清朝の權威のシンボルの一つであり、それへの北征軍の接近は焦慮すべき事態であったといえよう。

072 曖昧な例では、東京圖書株式會社出版、ソビエト科學アカデミー版『世界史』近代 6 五六一頁以下がある。北征軍が進出するころ、捻黨の張樂行の集團が強大になっていたように述べてある。北征軍通過のころは捻黨は大彈壓で逼塞氣味であったことは先にも觸れたし、張樂行は周天爵の下に兵勇として

一時逃げ込もうとしていたことは、『渦陽縣志』（『拾遺』Ⅱ 九九頁）、『宿州志』（同 一二二頁）に見えるところである。

073 梨本祐平『太平天国革命の研究』（一九七二年版）中の「北伐」の項、一三二頁以下の記述は誤りが多い。一つ一つの指摘に勝えぬ。また取り上げるほどでないが、松田壽男・森鹿三編『アジア歴史地図』（平凡社 一九六六年版）にも北征軍の進路につき、小さいが誤りが認められる。訂正されたであろうか。（進路については、判らぬ箇所が多く、今後もししいものはできにくいと思うが、主要点についてだけ試みに表わしてみるのが附圖、頁一一〇である）

誤りなどの出る原因はおそらく『實錄』、『東華錄』、いまの論の場合、『方略』などにまじめに當たらぬためかとも思われる。何といってもこれらは基本圖書である。

おわりに、この文を書くことを勧めて下さった永田英正氏、多くの便宜や教えをいただいた小野信爾、和子兩氏、また特に井上裕正氏に深く感謝申し上げる。

なお一の「兵數について」は『富山縣高等學校教育研究會紀要』（昭和五十一年度分）に概略を發表したが、いま加筆訂正した。

On the Northern Expeditionary Army of the  
T'ai-p'ing t'ien-kuo 太平天国  
—A preliminary essay concerning certain issues—

*Ihachirō Horita*

It may be safely said that one of the greatest events in modern Chinese history was the Northern Expedition of the T'ai-p'ing Army, an event to which many scholars have been attracted. Yet still there are several problems which remain unclear for us, e.g., the number of their troops, the causes of its failure, and the tactics of the Ch'ing authorities. The chief conclusions of this essay with respect to these issues are as follows:

1. The number of troops were at least twenty thousand or perhaps slightly more at the start and about thirty thousand when they were near Tientsin 天津; this conclusion was reached by making use of the official documentation recorded principally in the *Ch'in-ting chiao-p'ing Yüeh-fei fang-lüeh* 欽定勦平粵匪方略 and the *Tung-hua lu* 東華錄.
2. The main causes of its failure lay in the differences in social and political conditions between South China which had already been in the throes of general convulsion and North China where the ruling Ch'ing house still prevailed and where life was less tumultuous; in addition, the geographic and climatic conditions in the North proved unfavorable to the Expeditionary Army.
3. The Ch'ing military authorities acted defensively though effectively, while the T'ai-p'ing forces wasted their time and strength in crossing the Yellow River 黃河, besieging Huai-ch'ing 懷慶, and camping near Tientsin.